

若手研究者の研究と教育の両立、キャリア形成の意味

同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程 孫 琳

2020年12月5日に「若手研究者の研究と教育の両立、キャリア形成の意味」をテーマとした第47回若手研究者・院生情報交換会がZOOMによるオンライン形式で開催された。本来、今回の情報交換会は今年の2月に開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止することになったため、はじめてのオンライン形式で行われた。

情報交換会の内容については、野村裕美氏（同志社大学社会学部准教授）による基調講演が行われた後、3名の若手研究者から自分の経験を踏まえ、キャリア形成のための取り組みや教員に至るまでのプロセス、または研究と教育を両立させるためにしたことなどについて報告していただいた。留学生でありながら、これから研究者として日本で活躍したい私にとっては大変有益な内容であった。ここでは、本会に参加しての感想を踏まえながら、今回の情報交換会の様子について報告していきたい。

同志社大学の野村裕美氏による「自分の身に置き換えて考えるということ」をテーマとした基調講演では、野村氏自身の研究関心である事例教育法を説明したうえで、教員としての教え方、また野村氏につづく3名の報告を聞くときの姿勢などについて講演が行われた。野村氏によると、学生に「何を教えるのか（コンテンツ・ベース）」ではなく、専門職になる学生の資質や能力を「どのように身に付けさせたいのか（コンピテンシー・ベース）」が重要である。そのなかで、ケースメソッドという手法を用いることで、学生たちは事例の中に身を置き、模擬体験を通して、「私だったら、どうする？」を考えさせられる。重要なのは、相手の気持ちになって考える（感情移入）より、自分に置き換えて考える（自己移入）ことである。それによって、多様な経験をした他者から意見や生き方を学び入れ、自己モデルを形成していく。このような「自分の身に置き換えて考える」ことを念頭に置きながら、つづいての3名の若手研究者自身の経験に関する報告を聞くことができた。

まず、大阪商業大学 JGSS 研究センターPD 研究員の孔栄鐘氏による報告であった。孔氏は留学生の立場に立ち、「研究」・「教育」・「社会」にかかわる活動から自分自身が日本でキャリアを形成して継続するための取り組みについて報告を行った。孔氏の場合、留学生であり、四大家族の扶養者でもある。そのため、博士課程修了後、ビザや生計などの日常生活にかかわるものを考えなければならない。日本での就職を決めた後、博士号を獲得するための研究活動や非常勤講師としての教育活動、または学会参加などの社会活動を行なった。報告の中で一番印象に残ったのは、「孔研究会」のことである。孔氏が所属していた大学では院生が比較的にな少ないため、知り合いの若手研究者や外部の先生方、実践現場の方々と一緒に研究会をやることにした。研究会を通して、自分の研究に関する意見やコメントをいただ

くだけではなく、非常勤講師に関する声かけなどにも繋がっていった。また、孔氏は共著の執筆などの共同研究にも積極的に参加していた。報告の最後にあった「行動がチャンスを引き寄せる場合もある」という一言のように、院生または私たちのような留学生にとっては目指すゴールに向かって、積極的に取り組むことが望ましいと学んだ。

そして、花園大学社会福祉学部専任講師である深川光耀氏は、まちづくりの実務家から大学教員に至るプロセスについての報告を行なった。深川氏は大学時代からまちづくりと関わりはじめ、民間まちづくりシンクタンク（金沢）や京都市まちづくりアドバイザーを経て、2019年度から現職に着任した。京都市まちづくりアドバイザーを担当したとき、博士後期課程に入学し、2021年に修了する予定である。深川氏自身の言葉を借りて言えば、彼のキャリア形成はまちづくりという狭い領域での民間・行政・博士後期課程・大学教員のようなパラレルキャリアである。このような多様な経験を自分の強みとして現職の採用にも生かした。また、授業準備・子育て・研究という忙しい生活を繰り返すなかで、生活のあり方を見つめ直した。深川氏の報告では、現職に採用された成功経験だけではなく、これまで失敗した就職活動も紹介していただいた。そこで学んだのは、自分の弱みと強みを明確にしたうえで、強みをきちんと相手に伝えることが重要だということである。

最後に、関西福祉科学大学に所属している朴蕙彬氏の報告では、博士論文作成のプロセスや就職するまで工夫したことなどについて聞くことができた。朴氏は2004年から日本での留学をはじめ、学部・修士課程・博士課程・実習助手という経験を経て、2019年に現職に着任した。卒業論文と修士論文では、韓国の高齢者就労支援や国際比較などについて研究を行なったが、博士課程では視野を広げようとし、エイジズム研究にたどりつき、高齢者ステレオタイプの変遷の分析と類型化を行なった。また、就職をするために、社会福祉士の資格を取得し、教員講習会を受講するなどの工夫をした。教員になってから気づいたこととして、自分の研究分野だけではなく、専門分野以外にも関心を広げることが必要であると述べていた。そして、大学の教員は教育と研究だけではなく、事務関連の仕事にも携わるなかで、研究者としての自分のアイデンティティを忘れないように常に心がけることが重要であることも述べていた。

また、その後の質疑応答では、参加者（24名）の質問に対して、4名の報告者から研究活動や教育活動の中で苦勞したことやこれからの計画、日本に残った理由などについて回答をいただいた。今回の情報交換会を通して、多様な経験をした先生方の話しを聞くことができ、これから研究者あるいは教育者となることを志望している私にとって、大変参考になった。そして、最後になるが、今回のオンライン開催となった情報交換会に携わった担当の先生方にもこの場をお借りして感謝の気持ちをお伝えしたい。